

《絹のはしご》 作品解説

水谷 彰良

初出は『ロッシニアーナ』（日本ロッシーニ協会紀要）第11号（1998年発行）の拙稿「ロッシーニ全作品事典（5）《絹のはしご》」ですが、全面的に増補改訂した本稿を決定版としてHPに掲載します。（2011年5月改訂）

I-6 絹のはしご *La scala di seta*

- 劇区分** 1幕のファルサ・コーミカ (farsa comica in un atto) [初版台本の記載: farsa comica d'un atto solo]
- 台本** ジュゼッペ・フォッパ (Giuseppe [Maria] Foppa, 1760-1845) 全17景、イタリア語
- 原作** フランソワ=アントワーヌ=ウジェーヌ・ド・プラナール (François-Antoine-Eugène de Planard, 1783-?) がピエール・ガヴォー (Pierre Gaveaux, 1761-1825) のために書いた1幕のオペラ・コミック台本『絹のはしご (*L'échelle de soie*)』(1808年8月22日パリ、(Opéra-Comique) [フェイドー (Feydeau)] 初演)。
- 作曲年** 1812年3月末～4月末または5月初め (推測)
- 初演** 1812年5月9日 (土曜日)、ヴェネツィア、サン・モイゼ劇場 (Teatro di San Moisè [Teatro Giustiniani in San Moisè])
- 人物**
- ①ドルモン Dormont (テノール、e'g") ……ジューリアの後見人
 - ②ジューリア Giulia (ソプラノ、c'b") ……ドルモンに後見されている娘 (後見人に内緒でドルヴィルと結婚している)
 - ③ルチッラ Lucilla (ソプラノまたはメゾソプラノ、d'g") ……ジューリアの従姉妹
 - ④ドルヴィル Dorvil (テノール、d'c") ……ジューリアの夫
 - ⑤ブランサック Bransac (バス、A-f#') ……後見人の認める求婚者
 - ⑥ジェルマーノ Germano (バス、A-f#') ……ドルモンの召使
- 他に、一人の召使 (黙役)
- 初演者**
- ①ガエターノ・ダル・モンテ (Gaetano dal Monte, ?-?)
 - ②マリーア・カンタレッリ (Maria Cantarelli, ?-?)
 - ③カロリーナ・ナゲル (Carolina Nagher, ?-?)
 - ④ラッファエーレ・モネッリ (Raffaele Monelli, 1782-1859)
 - ⑤ニコラ・タッチ (Nicola Tacci, ?-?)
 - ⑥ニコラ・デ・グレチス (Nicola de Grecis, 1773-1826)
- 管弦楽** 2フルート/2ピッコロ、2オーボエ、1ホルン・イングラーゼ [イングリッシュ・ホルン]、1ファゴット、2ホルン、弦楽5部、レチタティーヴォ・セッコ伴奏楽器
- 演奏時間** 序曲: 6分、全1幕: 約80分
- 自筆楽譜** 音楽文化振興財団ニーダール・コレクション、ストックホルム
- 初版楽譜** Tito di G. Ricordi, Milano, 1852. (ヴォーカルスコア) 註: 19世紀に出版された本作唯一の全曲楽譜。
- 全集版** I / 6 (Anders Wiklund 校訂, Fondazione Rossini, 1991.)

楽曲構成 (全集版に基づく)

- 序曲 (Sinfonia): ハ長調、4/4拍子、アレグロ・ヴィヴァーチェ～アンダンティーノ～アレグロ
- N.1 導入曲〈あっちへお行き、邪魔しないで *Va sciocco, non seccarmi*〉(ジューリア、ルチッラ、ジェルマーノ)
— 導入曲の後のレチタティーヴォ〈大丈夫よ。出てきて *Siamo sicuri. Uscite*〉(ジューリア、ルチッラ、ドルヴィル、ドルモン、ジェルマーノ)
- N.2 ジューリアとジェルマーノの二重唱〈あなたが良い心の持ち主だと判っています *Io so ch'hai buon core*〉(ジューリア、ジェルマーノ)
— 二重唱の後のレチタティーヴォ〈ああ、挨拶は抜きで… *O senza cerimonie...*〉(ドルヴィル、ドルモン、ブランサック)
- N.3 レチタティーヴォ〈さあ、早く *Va lesto*〉とドルヴィルのアリア〈どんなに魅力的か見てやろう *Vedrò qual sommo incanto*〉(ドルヴィル、ブランサック)

- アリアの後のレチタティーヴォ〈ぼくに女の心が征服できないとでも *Io non so conquistare un cor di donna*〉(ジューリア、ドルヴィル、ブランサック、ジェルマーノ)
- N.4 四重唱〈愛しい花嫁と結ばれたなら *Si che unito a cara sposa*〉(ジューリア、ドルヴィル、ブランサック、ジェルマーノ)
 - 四重唱の後のレチタティーヴォ〈早く行くんだ *Va là, presto*〉(ルチッラ、ドルヴィル、ブランサック)
- N.5 ルチッラのアリア〈時々心を感じるのです *Sento talor nell'anima*〉(ルチッラ)
 - アリアの後のレチタティーヴォ〈素晴らしい！ こんな事は初めてだ！ *Bellissima! il casetto è proprio nuova!*〉(ジューリア、ブランサック、ジェルマーノ)
- N.6 レチタティーヴォ〈でも万一 *Ma se mai*〉とジューリアのアリア〈愛しい人を呼び、ため息をつくの *Il mio ben sospiro e chiamo*〉(ジューリア)
 - アリアの後のレチタティーヴォ〈結構：お行きなさい *Brava: vada*〉(ジェルマーノ)
- N.7 ジェルマーノのアリア〈恋は甘く *Amore dolcemente*〉(ブランサック、ジェルマーノ)
 - アリアの後のレチタティーヴォ〈何だって？ *Cosa? come?*〉(ルチッラ、ドルモン、ブランサック、ジェルマーノ)
- N.8 フィナーレ〈家では皆眠っているのに *Dorme ognuno in queste soglie*〉(ジューリア、ルチッラ、ドルヴィル、ドルモン、ブランサック、ジェルマーノ)

物語 (時の指定なし。場所はパリ郊外のドルモンの家)

ジューリアの部屋(両側に小部屋が見える。ジューリアは後見人に内緒でドルヴィルと結婚しており、二人は毎夜、絹のはしごを使って逢瀬を重ねている)。召使ジェルマーノが結婚の心得を話そうとするので、ジューリアは苛立つ。従姉妹ルチッラが呼びに来てもジューリアが応じようとしないので、ジェルマーノは「何かあるな」と疑いを抱く(N.1 導入曲)。一人になったジューリアは隠れていたドルヴィルを呼び入れ、絹のはしごを使ってバルコニーから逃がす。そこへ後見人ドルモンとルチッラが現れ、婚約者との結婚を勧めていると、ジェルマーノが婚約者ブランサックの来訪を報せる。二人が迎えに行った際に、ジューリアはジェルマーノに思わせぶりの態度をとり、味方につけてしまう(N.2 ジューリアとジェルマーノの二重唱)。

入れ替わりに、ブランサック、ドルモン、ドルヴィルが登場する。早く花嫁に会いたいと急かすブランサックに対し、ドルヴィルは「ジューリアが後見人から押しつけられた相手と結婚する気がない」と伝えるが、自信家のブランサックは「彼女に直接確認するから、隠れて見てたまえ」と挑戦をしかける。ドルヴィルもお手並み拝見と応じ、身を隠す(N.3 レチタティーヴォとドルヴィルのアリア)。ジェルマーノも隠れて様子を窺っている。そうとは知らぬジューリアは、ブランサックの求愛の矛先をルチッラへ向けさせようとして相手の気を引くそぶりをし、これを誤解したドルヴィルがやきもきする。四者四様の誤解と勘違いで全員の頭が混乱する(N.4 四重唱)。

不意にルチッラと出会ったブランサックは、彼女の美しさに魅せられ、ルチッラも恋心の芽生えを感じる(N.5 ルチッラのアリア)。一方、ジューリアは真夜中の夫の訪問を待ち焦がれ、胸をときめかせている(N.6 レチタティーヴォとジューリアのアリア)。彼女の独り言を聞いたジェルマーノは、ブランサックが逢引きに来ると信じて居眠りする(N.7 ジェルマーノのアリア)。そこに現れたブランサックは、ジェルマーノが寝言でジューリアとブランサックが今夜逢引きすると言うのを聞き、有頂天になる。目覚めたジェルマーノは、この一件をルチッラに話してしまう。

真夜中。ジェルマーノとルチッラは逢瀬の現場を目撃しようと隠れている。そうとは知らぬジューリアは、絹のはしごでやって来たドルヴィルを迎え入れる。しばらくすると、ブランサックがそのはしごで彼女の部屋に現れる。慌てて小部屋に隠れるドルヴィル。ジューリアは訳が分からずうろたえるが、今度はドルモンの声が出てブランサックが隠れる。逢瀬の現場に踏み込んだつもりドルモンが格子戸を開けると、ルチッラがいるので驚く。まだいるはず、と探すと、ブランサック、ジェルマーノ、最後にドルヴィルが出てくる。怒るドルモンに対し、ドルヴィルは自分が既にジューリアの夫であると告げる。それを聞いたブランサックはジューリアを諦め、ルチッラとの結婚を宣言する。こととなりゆきにドルモンも折れ、全員が愛の勝利を高らかに歌って幕となる(N.8 フィナーレ)。

解説

【作品の成立】

《絹のはしご》はロッシーニがサン・モイゼ劇場のために作曲した五つのファルサの三作目に当たる。この作品は、大成功を取った前作のファルサ《幸せな間違い》が初演された1812年1月8日、もしくはその翌日にサン・モイゼ劇場の興行師アントーニオ・チェーラと結んだ契約によって作曲され、《幸せな間違い》と同じジュゼッペ・

フォッパ (Giuseppe Foppa, 1760-1845) が台本を手がけた。

フォッパとロッシーニによる新作の告知は 1812 年 3 月 12 日付の『ジョルナーレ・ディパルティメンターレ・デル・アドリアーティコ (Giornale dipartimentale dell'Adriatico)』でなされたが、当時ロッシーニはオペラ・セーリア《バビロニアのチーロ》初演のためフェッラーラに滞在中だった。四旬節のために書かれた《バビロニアのチーロ》は旧約聖書に題材をとる宗教オペラで、3 月 14 日に行われた初演も成功を収めた。

3 月 24 日にヴェネツィアに戻ったロッシーニは、ボローニャの母に宛てた手紙でサン・モイゼ劇場の歌手の顔ぶれを伝えるとともに、興行師チェーラから提案されたフォッパの台本が「歌手団にもぼくの音楽にも合っていない」と不満をもらし、「台本は [ガエターノ・] ロッシのものになると思う」と記している²。この手紙には《バビロニアのチーロ》の成功と並んで、「ヴェネツィアでは、総ての愛好家がぼくのファルサ [註:《幸せな間違い》を指す] の曲を歌い競っています」と書かれており、万事順調な様子がかがえる。この段階でロッシーニは二種の台本を比較してロッシのそれ (詳細不明) を気に入っていたが、フォッパの台本を使うよう強いられてしまった (フォッパはサン・モイゼ劇場の事実上の座付作家で、前記のようにロッシーニが不在の間に新作がフォッパ台本と発表されていた)。

《絹のはしご (La scala di seta)》の原作は、フランスの台本作家フランソワ=アントワーヌ=ウジェーヌ・ド・プラナル (François-Antoine-Eugène de Planard, 1783?) が作曲家ピエール・ガヴオー (Pierre Gaveaux, 1761-1825) のために書いた 1 幕のオペラ・コミック台本『絹のはしご (L'échelle de soie)』である (1808 年 8 月 22 日、パリのオペラ=コミック座にて初演)。その筋書きは、マリ=ジャン・リッコボーニ (Marie-Jean Riccoboni, ?-?) とマリ=テレーズ・ビアンコレリ (Marie-Thérèse Biancolelli, ?-?) 共作による 3 幕のオペラ・コミック台本『ソフィ、または隠された結婚 (Sophie, ou Le mariage caché)』に由来する (ジョゼフ・ヴェンツェル・トマ・コオー [Josef Kohaut, 1738-1793] 作曲。1768 年 6 月 4 日パリのコメディ=イタリエンヌ [オテル・ド・ブルゴーニュ] 初演)³。但し、秘密裏に結婚しているカップルを主人公とする喜歌劇は 18 世紀にさまざま作られ、有名作品にドメニコ・チマローザの《秘密の結婚 (Il matrimonio segreto)》(ジュゼッペ・ベルターティ台本。1792 年) がある。けれども台本の比較研究によってフォッパ台本が事実上プラナル台本の翻案であることが明らかにされ⁴、登場人物の名前も次に示すようにプラナル台本からの単純なイタリア語への置き換えが中心になっている。

作曲の経過を明らかにするドキュメントは残されていないが、ロッシーニは 4 月 27 日付の手紙で母に「いつものように、ぼくの音楽は美しいです。ぼくの仕事がうまくいくよう願っています」と述べている⁵。そして 12 日後に迎えた初演も大成功を収め、ロッシーニは自他共に認める「ヴェネツィア人たちのアイドル」となったのである (初演翌日の手紙、後述)。

プラナル台本の役名	フォッパ台本の役名
ドルモン氏 M.Dormont	ドルモン Dormont
ジュリー Julie	ジュリア Giulia
リュシル Lucile	ルチツラ Lucilla
ドルヴィル Dorville	ドルヴィル Dorvil
ヴェルセイユ Verseuil	ブランサック Bransac
トマ Thomas	ジェルマーノ Germano

【特色】

《絹のはしご》はロッシーニの五つのヴェネツィア・ファルサの中でも大変充実した作品で、自筆楽譜が現存する彼の最初のオペラとなる (習作《デメトリオとポリーピオ》から《バビロニアのチーロ》まで 5 作の自筆楽譜は、消失もしくは未発見)⁶。書き下ろしの序曲はロッシーニ初期のシンフォニアの名作として知られ、序奏に続いてしっとりとしたアンダンティーノの旋律を木管楽器とホルン独奏で聞かせ、アレグロの灑刺としたリズムと軽やかな音楽により劇への期待を高める。続く八つのナンバーは「導入部～二重唱～アリア～四重唱～アリア～アリア～アリア～フィナーレ」となっており、フィナーレ前の二つのナンバーが共にアリアである点が他のファルサと異なる (他 4 作のヴェネツィア・ファルサは二重唱を含む)。

導入曲〈あっちへお行き、邪魔しないで〉(N.1) はジュリアとジェルマーノの軽快なやりとりで始まり、中間部にジュリアの短い叙情的なソロを挟み、ルチツラを交えた爽快な三重唱で締め括られる。次の二重唱〈あなたが良い心の持ち主だと判っています〉(N.2) の前半部は感傷的な旋律でジュリアが懐柔を試み、ジェルマーノが彼女になびく様子が巧みに描写される (但し、後半部はやや平板)。ドルヴィルのアリア〈どんなに魅力的か見てやろう〉(N.3) ではアレグロ・ヴィヴァーチェの後半部に華麗な歌唱を求め、最高音が c³ に達する。

とりわけ素晴らしいのが中央に位置する四重唱〈愛しい花嫁と結ばれたなら〉(N.4) で、上向する弦の音型を反復させつつ人物それぞれの恋の誘惑、不安、疑いを巧みに交錯させて始まり、鮮やかなカノンのアンサンブルを挟み、活力に富むアレグロ・ヴィヴァーチェで閉じられる。一連の素材は次作《試金石》(1812 年 9 月 26 日、ミラーノのスカラ座初演) でも改作転用されることになる。ルチツラのアリア〈時々心を感じるのです〉(N.5) は才気に富む伴奏を持つ秀逸なシャーベット・アリアで、その主題は前作《バビロニアのチーロ》第 2 幕冒頭合唱の前奏が初出であるが、音楽の魅力が飛躍的に高められている (その音楽は後に《イタリアのトルコ人》で再使用される)。

コルノ・イングラーゼ [イングリッシュ・ホルン] のソロと 2 本のフルートを伴うジュリアのアリア〈愛しい人

を呼び、ため息をつくの) (N.6) は、しっとりとした叙情をたたえるカンタービレ部、感情の変化を巧みに表すテンポ・ディ・メツゾ、生気に富むカバレッタからなる秀曲である。続くジェルマーノのアリア〈恋は甘く〉(N.7) では幅広い表現が求められ、甘い恋の思いを語りながら徐々に眠って寝言でブランサックの問いに答える前半部と、目を覚ましてブランサックにすべてをぶちまけて愚弄する後半部のそれぞれに演技力が求められる。同役に優れたブッフオ歌手ニコラ・デ・グレチス (Nicola de Grecis, 1773-1826. 《結婚手形》ズルック役、後に《ブルスキーノ氏》ガウデンツィオ役を創唱) を得たことで、ロッシーニはヒロインの大アリアに続いて演劇的な山場を築くことに成功している。

フィナーレ〈家では皆眠っているのに〉(N.8) 前半の音楽の要となる弦楽器の柔らかな旋律(=長調、6/8拍子、アンダンテ・ジュスト)は、明らかにヨーゼフ・ハイドンのオラトリオ《四季 (Die Jahreszeiten)》(1801年) 第1部『春』の合唱〈来たれ、のどかな春よ〉(N.1) の借用である(全集版や従来の作品解説にこれに関する記述は無く、筆者が最初に指摘するものである。ちなみにロッシーニは前年5月にボローニャのアカデミーでハイドン《四季》の演奏に携わり、その音楽を熟知していた)。中間部(変ロ長調、2/4拍子、アンダンティーノ〜4/4拍子、アレグロ)と軽快なアンサンブル(=長調、3/4拍子、アレグロ)を経ての活力ある終結部が傑出しており(=長調、4/4拍子、アレグロ)、後奏の最後から4小節目に一瞬e♭を鳴らして意表を突く着想も機知に富む。

3月24日にヴェネツィア入りしたロッシーニは初演までの1ヵ月半の間に、序曲とレチタティーヴォ・セッコを含むすべての音楽を書き下ろした。ジューリアとジェルマーノの二重唱(N.2)の中間部(テンポ・ディ・メツゾに相当)の管弦楽の主題は半年前にボローニャで初演した《ひどい誤解》(1811年)ガンベロットのアリア(N.7)、フィナーレでブランサックの歌う〈真夜中だ!…È mezzanotte!...〉のフルートとクラリネットの旋律は習作期の《六つの四重奏ソナタ (Sei sonate a quattro)》(1804年)の第3番第3楽章の主題に起源を持つが、それらは前記ルチッラのアリアの主題やハイドン《四季》からの引用と同様、他の素材を記憶から呼び覚まして新たな音楽のきっかけに利用したにすぎない⁷。《幸せな間違い》の成功で自信を得たロッシーニは、色彩と表情に富み活力あふれるこの《絹のはしご》により早熟な才能を完全に開花させた。そして二つのファルサの成功が、1年後に同じヴェネツィアで発表するオペラ・セーリアとオペラ・ブッフアのジャンルにおける最初の名作《タンクレーディ》と《アルジェのイタリア女》への重要なステップとなったのである。

【上演史】

《絹のはしご》の初演は1812年5月9日サン・モイゼ劇場にて、ステファノ・パヴェージ (Stefano Pavesi, 1779-1850) 作曲《マルカントーニオ殿 (Ser Marcantonio)》の第1幕と二本立てで行われ(間にバレーも上演)、成功を収めた。同時代の批評は同年5月12日付『ジョルナーレ・ディパルティメンターレ・デル・アドリアーティコ』が唯一で、フォッパの台本を褒めつつドラマが《秘密の結婚》の完璧な模倣である点を唯一の過ちとしている。音楽は序曲も含めて曲がやや長いとしながらも賞賛を惜しまず、ロッシーニが「多数のモティーフ、対位法、次から次に現れる音のパスセージを完璧なハーモニーに適合させるすべを知っている」と称え、「コンチェルタートのストレッタが観客に不意の拍手喝采を喚起し」、最初の3晩に列席した作曲者は「曲ごとに賞賛され」「何度もカーテンコールされた」と書かれている⁸。ロッシーニは初演の翌日(5月10日)に書いた母宛の手紙に、こう記している——「ベッドに入る前にぼくのファルサについてお知らせします。シンフォニアからフィナーレの最後の音に至るまで大成功を収め (Furore in Grande)、大喝采ばかりでした。昨夜は何度も舞台に呼び出され、今夜のぼくは要するにヴェネツィア人たちのアイドル (L'idolo dei Veneziani) でした」⁹。

サン・モイゼ劇場では5月9日から6月11日まで約1ヶ月間に合計12回上演されているが、《マルカントーニオ殿》第1幕との二本立ては最初の4回だけで、5月23日から最終日までの8回は《幸せな間違い》との二本立てであった。これはより人気の高い作品との差し替えと理解でき、続いてシーズンの締め括りにチマローザ《秘密の結婚》が単独上演されている(6月13日と18日)¹⁰。《幸せな間違い》が突出した人気を博したため《絹のはしご》の流布は限定的で、1813年夏セニガッリアのコンドミナーレ劇場、1821年謝肉祭期間シエナのデイ・リンノヴァーティ劇場、1825年1月リスボンのサン・カルロス劇場が19世紀に行われた再演のすべてである¹¹。

20世紀の蘇演がいつ、どこで行われたのか判然としないものの、最初の重要な上演は1952年5月26日のフィレンツェ五月音楽祭とされる(指揮と演出:エミーディオ・ティエーリ、ジューリア:マリア・マンニ・ジョッティエーニ)。同音楽祭はキャストを変えて1954年9月21日に再演したが、どちらもたった1日のみ小劇場での上演だった。その後《絹のはしご》は各地の劇場で取り上げられ、1954年4月26日にロンドンのサドラーズ・ウェールズ劇場がイギリス初演、1966年2月18日にサンフランシスコ・オペラがアメリカ初演を行った。けれどもこの作品の真価が理解されるには信頼に足るエディションが不可欠であり、スウェーデンのストックホルムで再発見された自筆楽譜に基づくクリティカル・エディションの最初の上演が行われたのは1988年9月2日、ペーザロのロッシーニ・オペラ・フェスティヴァルにおいてであった(指揮:ガブリエーレ・フェッロ、ジューリア:ルチアーナ・セッラ、

ドルヴィル：ウィリアム・マッテウツィ)。

推薦ディスク

- ・ 1988年9月ペーザロ、ロッシーニ・オペラ・フェスティバル上演ライブ収録 Fonit Cetra、海外盤

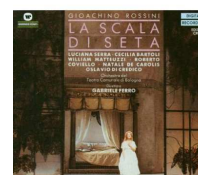
ガブリエーレ・フェッロ指揮 ボローニャ・コムナーレ劇場管弦楽団

- ①オスラヴィオ・ディ・クレディコ ②ルチアーナ・セッラ ③チェチーリア・バルトリ
- ④ウィリアム・マッテウツィ ⑤ナターレ・デ・カローリス ⑥ロベルト・コヴィエッロ

- ・ 1990年シュヴェツインゲン音楽祭上演映像 Euro Arts (DVD) 海外盤

ミヒャエル・ハンペ演出 ジャンルイージ・ジェルメッティ指揮 シュトゥットガルト放送交響楽団

- ①デイヴィッド・グリフィス ②ルチアーナ・セッラ ③ジェーン・パネル ④デイヴィッド・キュー
ブラー ⑤アルベルト・リナルディ ⑥アレッサンドロ・コルベッリ



- ¹ チェーラがロッシーニの母アンナに宛てた手紙(1812年1月9日付)にそのことが書かれている。この時の契約で同年春と秋、翌年謝肉祭シーズンのための三つのファルス作曲が約束された。
- ² Gioachino Rossini, *Lettere e documenti, IIIa: Lettere ai genitori. 18 febbraio 1812 - 22 giugno 1830*, a cura di Bruno Cagli e Sergio Ragni, Pesaro Fondazione Rossini, 2004., pp.6-9.[書簡 IIIa.2]
- ³ ここでのオペラ・コミック作品と作者に関する基本情報は Letellier, Robert Ignatius., *Opéra-Comique: A Sourcebook.*, Cambridge Scholars Publishing, Newcastle, 2010.に基づく。なお、『ソフィ、または隠された結婚』からその原作に遡ることも可能で、これについては Degrada, Francesco, *Letture della Scala di seta di Rossini* [in Programma del ROF, 1988.] を参照されたい
- ⁴ 全集版《絹のはしご》序文, p. XXII.
- ⁵ *Lettere e documenti, IIIa.*, p. 11.[書簡 IIIa.3]
- ⁶ 近年《デメトリオとポリーピオ》の四重唱のみ自筆楽譜が発見。《絹のはしご》の自筆楽譜も失われたと思われていたが、1980年代にストックホルムの音楽文化振興財団ニーダール・コレクション(Stiftelsen Musikkulturens främjande [Nydahl Collection])の所蔵が明らかになった。
- ⁷ さまざまな音楽を記憶の中から呼び出して創作の取っ掛かりとするのはロッシーニの作曲法の一部であり、こうした手法と旧作からの楽曲単位の転用や改作とは明確に区別する必要がある。
- ⁸ 批評の詳細は、全集版《絹のはしご》序文, pp. XXII-XXIII 参照。
- ⁹ *Lettere e documenti, IIIa.*, pp. 12-13.[書簡 IIIa.4]
- ¹⁰ シーズンの演目の詳細は Miggiani, Maria Giovanna. *Il teatro di San Moisè (1793-1818)*, [in Bollettino del Centro rossiniano di studi, ANNO XXX., Fondazione G. Rossini, Pesaro, 1990.], p. 146. サン・モイゼ劇場の上演システムについては、水谷彰良『サン・モイゼ劇場のレパートリー変遷と上演システムに関する試論』(『ロッシニアーナ』第26号 pp.1-21)を参照されたい。
- ¹¹ Radiciotti, Giuseppe. *Gioacchino Rossini: Vita documentata, Opere ed influenze su l'arte.*, 3-vol., Arti Grafiche Majella di Aldo Chicca, Tivoli, 1927-1929. に書かれた「1818年ヴェネツィア」は誤謬と思われる(全集版序文, p. XXIII.)。